

名古屋市立大学病院 内視鏡室

患者様1人1本のスコープを確保し 徹底した感染管理を实践

名古屋市立大学病院は、平成16年1月に17階建ての病棟・中央診療棟を開設し、それに伴い最新の高度医療機器を完備しました。また、外来の臓器別診療をさらに一歩進め、内科と外科の垣根を取り払った臓器別フロアを新設しました。それにより、検査から治療までを同じフロアで一貫して行うことができるため、患者様にとって利便性が高く判りやすい医療サービスを提供することが可能となりました。また、大学病院としてはいち早く本格的な電子カルテを導入し、リアルタイムで正確な情報を伝達することにより徹底した安全管理を行っています。また、画像やグラフなどを利用した分かりやすいインフォームド・コンセンツの実施や待ち時間の短縮、診療情報の開示にも電子カルテシステムが貢献し、患者様の厚い信頼を得ています。

内視鏡室でも、新棟開設時には感染対策の一層の充実を図るために内視鏡本数を増やし、患者様1人に対して内視鏡1本を用意しました。内視鏡部助教の中沢貴宏先生は、「当院の感染対策は世界標準に則って実施しており、スコープの洗浄についてはSPD(物品供給センター)に洗浄専門のスタッフを配置しています。そのため、患者様1人に対して看護師1人を配置し、患者様の介助に専念してもらうことができます。また、処置具のディスポーザブル化についても病院全体で早期から取り組んでおり、内視鏡室では全ての処置具をディスポーザブル化しています」と説明されました。このように徹底した感染管理を行っているため、近隣の施設が内視鏡室を立ち上げる際に見学に来られることもあるそうです。

近年の治療内視鏡の増加により、同院でもESD等の先端治療に対するニーズが多く、近隣施設からの患者様の紹介が



〒467-8602 名古屋市瑞穂区瑞穂町字川澄1番地
院長：上田 龍三
病床数：808床
年間内視鏡検査数(平成17年度) 5,083件(うち、上部消化管3,237件、下部消化管1,482件、胆・膵領域364件)
スタッフ：専属医師1名(他、消化器内科、肝臓内科、消化器外科、一般外科の医師が内視鏡検査、治療を施行)、看護師4名
スコープ本数：30本(うち、上部用16本、下部用8本、JF 2本、TJF 2本、JF-V 2本)

年々増えているそうです。また、最近では悪性疾患による幽門狭窄、十二指腸狭窄、大腸等に対するステント留置術を施行するなど、患者様のQOLを高めるために様々な手段を講じています。また同院は、膵石症に対するESWLを日本で最初に施行しているため、全国の施設から患者様が紹介で来院されます。そのため、膵石治療の補助療法としての膵管ステントも多数施行されているそうです。中沢先生は、「検査や治療が高度化していく中で、スタッフを固定化し専門性を高めることが非常に重要になってきます。そのため、現在のスタッフには内視鏡技師資格が取得できるよう、サポートしていきたい」とお話になりました。看護師の皆さんからも、「当院では各科のドクターが内視鏡室を使って様々な手技を行うので、物品を準備する際にも豊富な知識が要求されます。適切な介助や効果的な患者様のケアのためにも、手技に関する知識も高めていきたい」という声が上がリ、先進医療を支えるスタッフの皆さんの熱意の高さが伺えました。



内視鏡室のみなさん(前列中央が中沢貴宏先生)